

富山・石名田木舟遺跡 (1)



(石動)

- | | |
|-------|--|
| 所在地 | 富山県小矢部市石名田、西礪波郡福岡町木舟 |
| 調査期間 | 一九九四年(平6)六月～一九九五年一月 |
| 発掘機関 | (財)富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所 |
| 調査担当者 | 酒井重洋・柴口真澄(B2地区)、島田美佐子・武田健次郎(F2地区)、中川道子・山元祐人(F3地区)、池野正男・三島道子(G地区) |
| 遺跡の種類 | 古墳・集落・城下町跡 |
| 遺跡の年代 | 六世紀～一七世紀 |
| 7 | 遺跡及び木簡出土遺構の概要 |

石名田木舟遺跡は、富山県西部を流れる庄川・小矢部川により作られた、礪波平野の西端に位置する。遺跡の北西には、稻葉山をはじめとした丘陵が連なり、その裾を小矢部川が蛇行して北流する。遺跡は、元暦元年(一一八四)に石黒氏

によりこの右岸に築城された、木舟城の城下町と考えられている。この城下町は、一五世紀後半頃から栄えたと推測されるが、天正九年(一五八一)に越後の上杉方により攻められ落城し、織田勢により石黒氏は滅ぼされた。その後、城は佐々成政の家臣、佐々平左衛門が城主となり、天正一三年の豊臣勢の越中攻めの後は、前田秀次が城主となつた。しかし、天正二三年一月におきた白山地震で、城は倒壊して地中に沈み、城主の秀次も犠牲となり、翌年に城は小矢部市の今石動城へ移ったため、城下は荒廃したとされている。また、この辺りは、『和名抄』にみられる礪波郡二郷の一つ「長岡郷」の一部とされ、中世では後白河天皇の皇女室町院の荘園「糸岡庄」があつたとされる。

調査は、能越自動車道とそのアクセス道路の建設に先がけて実施し、一九九一年から三ヵ年をかけて五遺跡の調査を行なつた。そのうち、五社遺跡・開静大滝遺跡・石名田木舟遺跡が木舟城の城下町にあたると考えられる。石名田木舟遺跡の広がりは、道路敷内で延長約一・二km続く。

中世の遺構が集中するのは、B2地区とF3地区で、その他では散漫である。調査で出土した木簡は、一五～一六世紀を中心としたもので、呪符・付札などがある。また、古代の墨書き土器としては、D地区で「田」「甲」「河王」、E1地区で「□文」がある。

B2地区は木舟城の北側約300mに位置し、旧北陸道から木舟

城へ続く大門道路があつたとされる。調査では、中世で一・二・三面の遺構面がみられる。中央部分では、火事による二面の炭化物層（IIc層・IIe層）と整地・盛土（IId層・IIf層）があり、各遺構面で多くの遺構と遺物が見つかった。おもな遺構としては、掘立柱建物・礎石建物・根駄建物・井戸・溝・土坑・道路などがある。建物は、大門道路と考えられる南北に連なる道路を中心に、溝により区画された中に、三・五棟ほどが建てられていたと推測される。遺物は、中世土師器・珠州焼・越前焼・瀬戸美濃焼・輸入陶磁器（染付・青磁・白磁・交趾三彩・褐釉四耳壺）、金属製品（銅錢・分銅・鉛玉・紡錘車など二〇種）、木製品（刷毛・漆器・折敷・桶・箸・櫛・糸巻・自在鉤・建材など）など、約四〇〇〇点が出土している。木製品の残りは良い。また、墨書き土器では天目茶碗の底部に「月」と書くものがあり、漆器椀に漆で「吉」「木」と書かれたものもある。

調査地区は、木舟城へ続く大門道路に面した部分と考えられるごとや、礎石建物がみられることから、一般の町屋ではなく、かなり地位の高い家臣の屋敷地と考えられる。遺構の時期は、一六世紀を中心とし、白山地震で木舟城や城下町が倒壊する一五八五年までと考えられる。

F2地区の南部分では、F3地区から続く中世の遺構が検出される。木簡は、南に隣接するF3地区から続く溝から出土したもので、有機物が多く混じる黒褐色粘質シルト層から大量の土器・木製品などとともに出土した。

F3地区は、木舟城から約五〇〇m西側、B2地区からは、約五〇〇m西南にあたる。この地区は、方形の区画溝に囲まれた屋敷地と考えられ、この周辺では中心的な位置をしめる遺構と考えられる。遺跡は、南側のH地区まで約一〇〇mほど続き、谷となる。

F3地区にみられる区画は、約六二mの方形から八六mの方形区画に拡張されたと考えられ、その区画内に大きな敷地を持つ掘立柱建物・土台建物などが建てられている。遺物は、区画溝をはじめとした溝からの出土量が多く、その大部分が食膳具であり、硯・茶道具などの出土から、比較的高い階層の屋敷であったことが窺える。遺構は、一四世紀頃からみられるが、主要な遺構の時期は、一五世紀後半から一六世紀に主体がある。

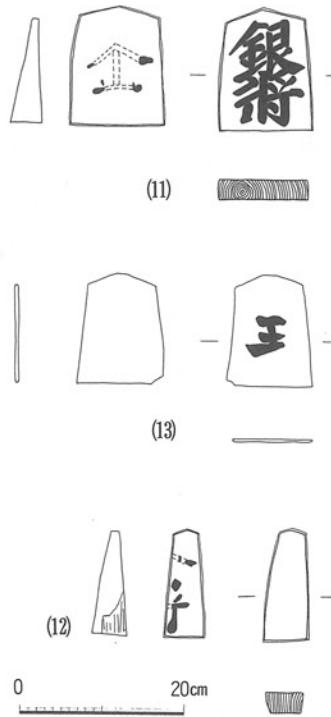
この地区では一辺約六二mの方形に巡る溝SD三〇から、大量の中世土師器皿・木製品をはじめ、いろいろな遺物が出土している。この溝が続くF2地区では、「長享二年」の年号が書かれた木簡(14)が出土している。

G地区は南西に落ちる谷の落ち際にあたる部分で、F3地区から続く中世の遺構で、比較的小規模な建物が並ぶと考えられ、町屋的な性格の強い遺構である。井戸が三〇基検出されたが、はつきりとした建物はとらえられない。木簡はF3地区から続く溝SD一一から出土している。

8 木簡の积文・内容

— B2地区

- (1) • いたう年於□百本□
• □□□
- (2) 「九郎ゑもん」
• □□□
- (3) • 「五大力节一□」
• 「伊藤小四□〔郎カ〕」
• □□□
- (4) • 「▽(記号) 二斗廿□」
• 「▽ 藤左衛門尉」
• □□□
- (5) 「二百まい山□小次郎」
• □□□
- (6) 「新左衛門尉」
276×24×4 051
- (7) • 「▽たう」
• 「▽三郎」
• □□□
- (8) • 「▽九郎左衛門」
• 「▽たうのやし□」
120×13×4 032
- (9) • 「▽九斗九升津せん□し」
• 「▽九斗九升はつおん水八し」
120×22×3 032
- (10) • 「六□六六 五五五」
〔△〕 □□□ 四三二
• □□□ 篓
- (11) • 「銀将」
• 「金」
38×34×10 061
- (12) • 「金将□〔カ〕」
33×(13)×11 061
- (13) 「王」
30×26×2 061
- (1) は、中層面の建物の雨落溝と考えられるSD九六七出土で、上
下が欠損している。表面末尾の文字は「合」か「分」。また、裏面
にも墨痕がみられるが判読できない。(2) (6) (9) は、II f 層(下層の盛
土・整地層)からの出土で、(2) (6) は人名だけの記載、(9) の記載は両
面がほぼ同じとなる可能性があり、「水八し」は現在の富山市水橋



(14) 長享二年
236×64×4 011

水溝SD一〇五三出土。この他、數文字が書かれた木簡片が七点、屋号あるいは記号と考えられる墨書（丸の中に大一、井桁中に大）がある。井桁は両面に描かれており、文字が続くが欠損して読めない。また人形の顔部が一点、脚一点がある。

二 F2 地区

形状は、長方形の材の頭部を圭頭にしたもので完形品である。墨は残っておらず、痕跡だけがわずかに残る。中央より右寄りに一行、中央にそれよりやや大きな文字で一行書かれていることは窺えるが、判読できるのは、右側の行最後の「長享二年」だけである。長享二年は一四八八年にあたり、昨年の調査で出土した「大永二年」（一五六四）、「天正十一年」（一五八三）銘の鰐口、「永禄七年」（一五二二）銘の石硯に続き、遺跡の時期を考える上で貴重な資料といえる。

三 F3 地区

溝SD〇三出土

(11)～(13)は、将棋の駒。それぞれIIc層（上層炭化物層）、調査区中央の上層で検出された、直径60cm、深さ40cmほどの円形の土坑SK一二二出土。(12)は「金将」を再加工して新たな駒としている。(13)は、調査区中央の中層面の建物に伴う、幅60cmほどの東西の排

(15) • 「□□□」……尉□□□
司□□□

(278)×30×3 011

漢書卷之五十一

- (16) 「銀將」

- 金

34×29×6 061

- (17)

- 三
□直
□謹

32×(18)×4 061

- 16

- (18)

(75) $\times 24 \times 2$ 039

- (19)

(101) × (13) × 6 033

- 五八

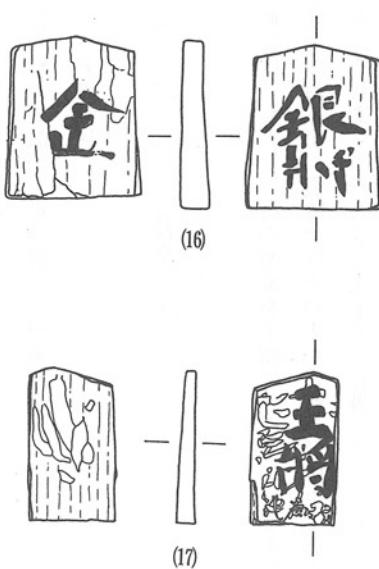
- (20) • []

(98) $\times 23 \times 4$ 039

- Γ ⊢ ⊥

- (21)

(46) $\times 17 \times 1$ 081



(22)

(44) \times (20) \times 1 059

130

(23) いし本数事こおり能文

(195) × 19 × 3 051

(17)は木簡を転用した駒で、先に書かれた文字の上から「王将」と書き入れる。(22)は表裏で文字が天地逆に書かれている。(23)の二文字目は「く」か「は」。



(24)

(26) 「○(梵字) 奉講如意□経玉守護□□」

253×61×4 011

(27) 「△宮之殿 御申八郎□□□」
「△おたのり□□□」

171×24×2 033



(24) 「(符籙) 鬼急々如律令☆」

147×26×2 011

(25) 「意得御 □□」
定之趣能事

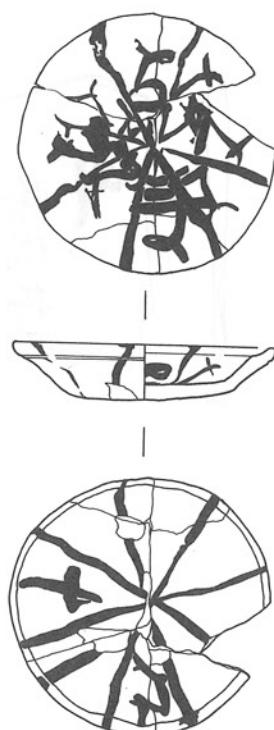
(26) は梵字にかかるように目釘が残る。この井戸は整地した建物の敷地内にあり、中世土師器皿・箸・折敷などとともに出土している。木簡以外の資料として、溝SD〇三から墨書された中世土師器皿が数点出土している。一点を除き落書状の墨痕で読めないが、図示した皿は両面を八等分し、内面はその枠内に一~八までの数字と文字(人カ)あるいは記号を書き、外面は三つの枠内に「十」などの墨書がある。



58×(23)×1.5 021

(24) は最下層から出土した呪符で、付近からは硯が出土している。その他の遺物としては、大量の中世土師器皿・漆器椀・箸・曲物・折敷などの木製品がある。

井戸SE8-1-2出土



墨書土器

(28) • 「除臨兵 〔闕カ〕
（梵字）

(55)×(34)×2 081

• 「（梵字）

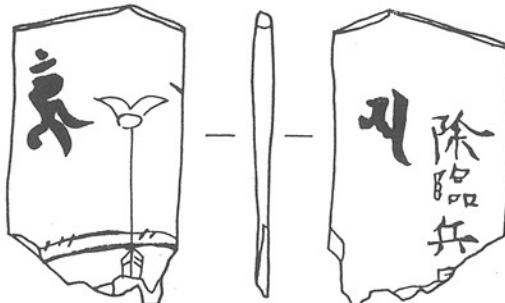
一面には、「除臨兵（闕）」の文字と梵字、反対の面には梵字と弓矢の絵が描かれている。左側面が欠損しているが、両面とも明瞭に判読でき、水野正好氏によると「九文字からなる呪い返しの呪符の一部である」という。この他遺物には、中世土師器皿・珠州焼・越前焼・瀬戸美濃焼（花瓶）・青磁・白磁・漆器椀・箸・曲物がある。なお木簡の解読にあたり富山大学富田正弘・本郷真紹両氏、呪符木簡については、奈良大学水野正好氏からご教示いただいた。

9 関係文献

（財）富山県文化振興財団『埋蔵文化財調査年報（6）』平成六年度

（一九九五年）

（酒井重洋・中川道子・山元祐人・島田美佐子・三島道子）



(28)